

國學院大學學術情報リポジトリ

〈日本文化〉を誰に伝えるか： 特集研究開発推進機構十周年

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001744

〈日本文化〉を誰に伝えるか

井上 順孝

はじめに

日本文化研究所は一九五五年の創立以来、研究成果の国際発信を常に心掛けてきた。私が日本文化研究所に着任した一九八二年度以降の活動から、その一端を示してみる。國學院大學創立百周年記念事業の一環として、一九八三年一月に日本文化研究所主催で国際シンポジウム「アジアの近代化と民族文化」が開催された。このシンポジウムでの講演や会議の内容は、同年日本語とともに英文でも刊行された。*Cultural Identity and Modernization in Asian Countries*というタイトルである。その十三年後の一九九六年一月に、やはり日本文化研究所の主催で国際シンポジウム「グローバル化と民族文化」が開催された。この会議の紀要も、*Globalization and Indigenous Culture*として翌九七年に刊行された。

こうした国際シンポジウムの報告の英文刊行だけでなく、恒常的に英文翻訳事業も進めてきた。日本で刊行された日本宗教関係の論文を選び、英訳してテーマごとに一冊の書籍として刊行するという事業である。Contemporary Papers on Japanese Religion というシリーズ名が付され、一九八八年に第一巻の *Matsuri: Festival and Rite in Japanese Life* が刊行された。続いて九一年に第二巻の *New Religions*、九四年に第三巻の *Folk Beliefs in Modern Japan*、そして九八年に第四巻の *Kami* が刊行された。

二〇〇二年に採択され、五年にわたって実施された國學院大學二一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の第三グループでは、日本文化の国際発信に関わる二つの大きな事業をおこなった。一つは二〇〇二年三月から二〇〇六年九月まで合計六回開催された国際シンポジウムである。もう一つはオンライン英文神道事典EOS (*Encyclopedia of Shinto*) の公開である。

このように日本文化研究所ではこれまで主に英語を用いて積極的に国際発信を行ってきた。だが、情報化とグローバル化が日々進行する時代にあつては、外国語に翻訳した研究成果を書籍で刊行したり、ウェブ上に公開するという基本的作業に加え、それをどういう方針のもとに行うかという理念のようなものをあらためて再考しなければならなさと感じられるようになってきた。日本文化研究所という名称は「日本文化」を研究する機関ということを明確にしているが、ではその場合の「日本文化」は何を念頭においているかである。また英語以外の言語での積極的な発信も考慮しなくてはいけなくなった。

一、〈日本文化〉とは？―宗教文化を中心に考えてみる

①起源から生じる謎―多様な文化を受け入れてきたゆえの分かりにくさ

日本文化についてあらためて考えることを促すようになった最近の研究動向や社会状況のうち、特に注視すべきものについて三点ほど取り上げたい。まず一つ目は、日本文化の起源について、DNA研究を参照した考古学、神話学などの近年の展開は、日本文化が複数のルーツをもつことを明らかにしてきている。日本文化の基層などという言葉を用意に使えなくなってきた状況がある。

二〇一五年に開催された日本文化研究所主催の国際研究フォーラム「日本文化」研究の展望」において、「DNAで読む日本人の形成史」と題する非常に興味深い発表が、国立科学博物館副館長で人類学者の篠田謙一氏によりなされた。篠田氏はこの発表の中で次のような内容のことを述べた。

「現在では我々のルーツがアフリカにあることがわかつている。探るべきは我々日本人の起源地ではなく、成立の経緯だ。日本人の起源を考える際に問うべきは、アフリカを出発した人類が、日本列島にいつごろ、どこから人が入ってきて、その後のアジアにおける集団の移動の中で、どうやって成立していったのか¹⁾。」

篠田氏はDNA分析に際してハプログループに注目し、日本人が少なくとも三つのルーツをもつことや、現在の日本人が東アジアに住む人々のハプログループのそれぞれどのような類似性があるかなどを紹介した。

米国のハーバード大学教授で神話学者のマイケル・ヴィツェル氏は、二〇一三年に来日し、日本宗教学会と日本文化研究所の共催により、この常磐松ホールで行われた公開講演会において、世界の神話についても非常に幅広い視野から論じた。ヴィツェル氏は人類の先祖が六〇七万年前にアフリカを出たとき、すでに神話をもっていたという仮説

があることを紹介した。⁽²⁾こう考えると、世界に数多く存在する神話がいくつかの類型にまとめられたり、似たようなモチーフをもっていたりする理由が納得しやすくなる。

この広い視点からの神話研究は当然に日本神話の研究のあり方にも及んでくる。記紀神話もルーツはまだ十分は分かっていないところがあるが、複数のルーツをもつことはこれまでの研究において定説となっている。それがさらにアフリカ起源の段階にまでさかのぼらせるような発想が存在するというのである。

こうした人類の起源にまでさかのぼるような研究は、日本文化の淵源をどのように考えるかに大きな影響を与える。日本文化固有のといった表現はよく使われるが、何が固有なのか、どこから固有に展開として考えた方がいいのか。はっきりしているのは、日本周辺さらには世界における文化の形成と広がり、相互影響を検証するというプロセスを抜きにして日本文化の起源を論じることが無謀だということである。

②現代社会で見えにくくなっているもの―グローバル化の急速な進行で見えづらくなった〈日本文化〉

他方、現代日本に進行している社会現象を観察しても、日本文化の再考を促すような事態を多く目のあたりにする。日本社会では一九八〇年代からグローバル化の進行が顕著になった。法務省の統計を見ると、一九八〇年に入国した外国人の総数は百万人台であったが、九〇年には三百万人台となり、二〇〇〇年には五百万人台になっている。二〇一三年には一千万人を超え、二〇一六年には二千万人を超えている。一九七七年以前はずっと百万人以下であったことを考えると、急速に増加したことが分かる。

アジアからの訪問者も増えているが、その大半は中国と韓国である。しかし東南アジアからの入国者が二一世紀にはいってうなぎのぼりに増えている。これは宗教文化の観点からすると、日本にとって非常に大きな意味を持つ。中

国や韓国は大乗仏教、儒教、道教といった宗教において、かなり共有するところが大きい。韓国・北朝鮮は現在ではハングルを用いているが、歴史的には長く漢字を共通に用いてきた。神、霊、祖先、祭祀といった宗教文化の基本的用語に関してもほぼ同じ文字をあてる。しかし東南アジアはイスラーム、上座仏教、ヒンドゥー教などが広がる地域である。宗教についての発想法も大きく異なることがある。日本文化を伝えるという場合にも、東アジアに対するものと同様でいかどうか問題になってくる。

情報化は一九九〇年代後半のインターネットの普及によって加速化され、二一世紀にはいると、ほとんどの日本人がインターネットを介した情報に接するようになる。インターネットを用いた情報のやりとりの特徴の一つはボーダレス化である。国境を越えた情報のやりとりが日常茶飯になるので多様な宗教文化の情報に接することが格段に便利になった。

このように、グローバル化と情報化の進行は、人的交流が急速に増加し、さまざまな国の情報が短期間に広がることを意味するので、文化が混じり合うスピードはきわめて速くなる。たとえば、文化の中核にあるとされる言語もグローバル化や情報化の影響を避けられない。

一つ分かりやすい例を挙げてみる。渋谷駅近辺で撮影された二枚の写真を比べて見たい。一九三三年当時の写真を見ると、建物の看板に書かれている文字は、確認される限りすべて漢字かひらがなである。ところが二〇一六年に渋谷駅近辺のスクランブル交差点の周囲を撮影した写真を見ると、アルファベット、外来語を表記したカタカナが圧倒的に多く、漢字の看板はほんの一部である。建物の看板は人間でいえば名札に近い。それがこのような状態であるということとは、言語に対する感覚も大きく変わっているということである。

ではこれは日本文化ではない、日本語ではない、ということになるか。そう言ってしまうと東京の街からは日本文

化が消滅しつつあることになる。そうではなく、やはりこれは日本文化の現代的表現であると捉えるのが適切であろう。

文字の事例は分かりやすいので例示したのだが、宗教文化においても同様のことは起こっている。さまざまな宗教文化の相互影響が短期間で起こるようになった。神社に関わることを例にとってみる。絵馬は古くから見られ、人々が神に祈願するスタイルとして日本社会に馴染んでいる。古典的な絵馬は絵を描くか日本語の文字を書くかである。

二一世紀になって急速に広がった一つに痛絵馬がある。これはアニメの主人公などを絵馬に描いて奉納する。これなどは、絵の質が変わったと理解できなくもない。だが、書かれている文字に着目すると、日本語ではない文字で書かれた絵馬が急増している。外国語で祈願の文章が書かれた絵馬が多く見られるようになっていく。二〇一五年に対馬で神社調査をしたときには、ハングルで文章が書かれた絵馬が半数近くになっている神社があった。社殿の壁に貼ってあった「私日本人でよかった」というポスターとの対照性が目立った。外国語で祈願された絵馬は多くの神社で見いだされる。とくに東京、奈良、京都など観光客が多い神社では、英語や中国語、その他の言語で書かれた絵馬を数多く見つけることができる。

IT技術を利用したものとしては「楽天Edy」でのお賽銭という例がある。二〇一七年の初詣の際、都内の神社が日にちを限定して導入したことで話題になったが、お賽銭は現金でというこれまでの通例が変わる可能性⁽³⁾がある。ITお守りは、神田明神のものが有名である。秋葉原の電気街を氏子区域に含む神田明神では、「IT情報安全祈願」等のお守りを販売している。コンピュータ・テクノロジーを昔ながらのお守りが守るといえるのは、安心というものの特徴を示しているが、これもまた現代日本における宗教文化の一面である。

③ 外国人の〈日本文化〉に対する関心の多様化

日本における変化とともに、外国人の日本文化についての認知のあり方も変わってきている。おおよその傾向としては、伝統的とされてきた〈日本文化〉だけでなく現代の〈日本文化〉への関心が増加している。たとえばフランスでは日本の伝統的文化への関心は高く、能や歌舞伎などには以前から強い関心が示されてきた。しかし最近では日本の漫画・アニメへの関心を強く抱く若い世代が増えている。INALCOで日本文化を教えていたビュテル氏によれば、二〇〇〇年代になって日本語を学びたいという学生は一つの大学で毎年数百名いたりするが、その大半は日本のアニメや漫画を読みたいという理由によるということであった。

また宗教について言えば、日本宗教で国外布教を広く行っているのは、主に新宗教である。神社神道はほとんどなく、仏教では禅仏教が欧米を中心に人気があり、禅センターが各地にできている。だが、外国人信者の数という圧倒的に新宗教が多くを占める。表1は、宗教情報リサーチセンターがウェブ上に公開している教団データベースに基づいた国外の信者数である。教団側の発表した数字であるので、実数とはかけ離れた数値もある。しかし創価学会が百万人以上の外国人信者がいるのはほぼ確かと思われる。ブラジルで日系新宗教が十万人単位の信者を得ていることは、新宗教研究者の間では広く知られている。東南アジアや南アジアに数千人から一万人以上の外国人信者がいる新宗教教団は増加している。

表1 国外信者数

(宗教情報リサーチセンターのデータに基づく)

霊友会	289 万人
創価学会	175 万人
生長の家	50 万人以上
伊勢神宮	50 万人以上
崇教真光	10 ～ 50 万人
PL 教団	10 ～ 50 万人
真如苑	10 万人
天理教	5 万人
立正佼成会	1 万 5 千人

このことから、外国人が日本宗教について体験的に知る割合、つまり近くに日本宗教の施設があるとか、日本宗教の信者が身の回りにいるという割合は、新宗教によるものが多くなると推測される。国外布教している新宗教の多くは英語その他の外国語で書かれたホームページを作成しているので、ネット上でもこうした宗教についての情報を得る外国人が多いと推測される。日本宗教といえば神道や仏教というふうに理解される時代ではなくなっている。

二、誰に伝えるのか？

① 研究開発推進機構における英語中心から多言語化への展開

何を〈日本文化〉とするかを考える上で、現代はきわめて複雑さが増してきているのは確かである。とはいえ、このような根本的な問いは、そもそも答えるのが困難な問題であり、そう簡単に議論の道筋が見えるようなものではない。そうした根本的な問題とともに、〈日本文化〉を伝えようとするときのより具体的な課題も生じた。それは研究してきたことを誰にどのような言語を用いて伝えるかということが、グローバル化、情報化のもとで非常に多様になってきたことに起因する。伝えようとする対象と用いる言語に関する問題をとくに日本文化研究所がこれまで行ってきた神道研究の紹介ということに即して述べる。

先に述べた二一世紀COEプログラムの推進によってEOSが公開されたが、EOSの公開を通して生じた問題について触れる。EOSはもともと日本語で刊行された『神道事典』の本文を翻訳したものであるが、『神道事典』は次の九部からなっていた。

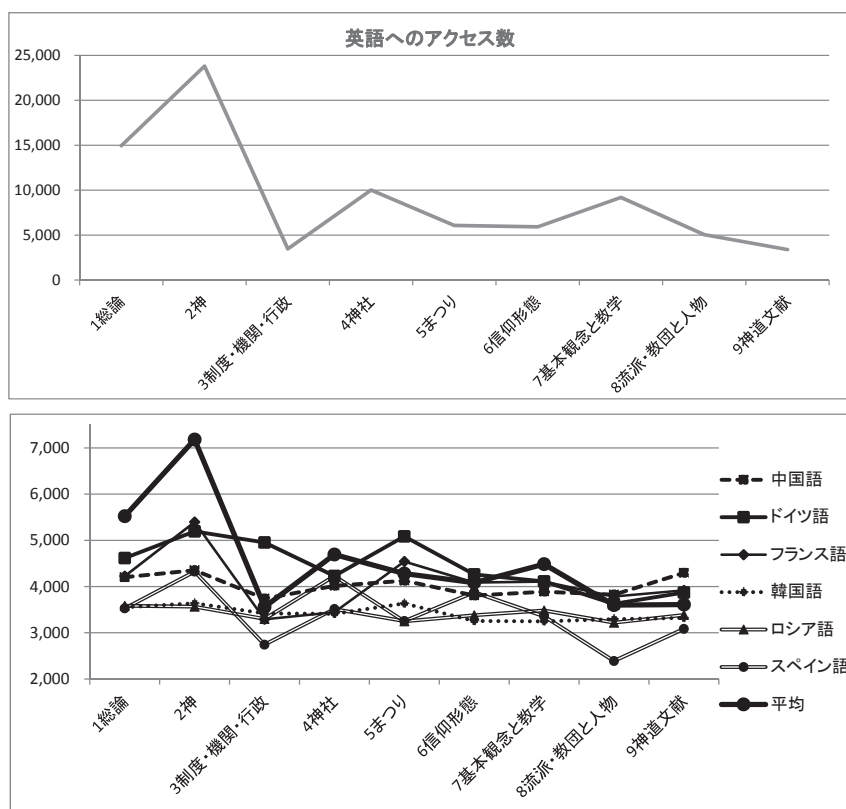
「一 総論」、「二 神」、「三 制度・機関・行政」、「四 神社」、「五 まつり」、「六 信仰形態」、「七 基本観念

と教学」、「八 流派・教団と人物」、「九 神道文献」。

これらの各部には総論がある。この総論は英語の他、中国語、ドイツ語、フランス語、韓国語、ロシア語、スペイン語に翻訳した。また、このうち「神」、「神社」、「流派・教団と人物」は韓国語にも訳し、オンラインで公開するとともに書籍でも刊行した。この三つの部を選んだのは、韓国での研究に用いられる可能性が高いのではないかという推測に基づいている。⁽⁴⁾

外国人からすれば、神道事典のどの部分に関心があるだろうか。COEで作成したEOSには、各項目にどれくらいのアクセスがあったかのカウンターが設けられている。新しいバージョンが作成されたが、この

表 2



旧バージョンにも依然としてアクセスがある。これによって二〇一七年五月時点での各部の総論部分へのアクセス数を調べたのが表2である。もっともアクセスが多いのは「神」、もっとも少ないのは「制度・機関・行政」である。

どのテーマに関心があるのかは、使う国によって違うものであるうか。国と言語の関係はどの程度密接であるかは言語により異なる。英語とスペイン語以外はある程度の相関性を想定できる。

比較してみると、閲覧できる総論の言語別に多少の違いがあることが分かる。ほとんどの言語で「神」へのアクセスがもつとも多いが、ロシア語の場合は「神社」がもつとも多い。中国語と韓国語は全体に違いが少ない。スペイン語である、「制度・機関・行政」と「流派・教団と人物」への関心が低い。平均して神に次いで神社が多くなっているが、これは神道の特徴ということから考えても、比較的了解しやすい結果である。

きわめて限定的ながらEOSで始まった多言語化の試みは、二〇〇九年に研究開発推進機構が設立されてから、多くの機構内の機関で意識されるようになった。^⑤とくに二〇一四年から一六年まで文化庁の「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」助成を得た事業では、國學院大學博物館のホームページやパンフレット類を英語だけでなく、複数の外国語で表記するように努めるようになった。また研究開発推進機構のデジタル・ミュージアムでも多言語化を目指している。欧米の言語だけでなく、アジアの各国で用いられている言語によって発信することについても、より強く意識されるようになった。

EOSへのアクセスの結果からみても、東アジアでは神道への関心は全般にわたっているという可能性はある。ちなみに筆者の編著である『ワードマップ 神道』は英訳の他に韓国語訳がある。また同じく『神社と神々』には中国語訳がある。前者はやや専門書であり、後者は一般書であるが、こうした本が韓国語や中国語に訳されるということに、神道への関心が東アジアで一定程度存在することが示されていると考えていいのではなからうか。

東アジア諸国からの神道への関心は、必ずしも肯定的なものだけではなく、とくに中国や韓国からは靖国問題などには厳しい報道があることは周知のとおりである。それでも東アジアの宗教文化における類似点の多さは、神道への関心の根底に想定できる。欧米の言語への翻訳と異なり、東アジアの国々の言語に翻訳する場合は、歴史的出来事の解釈の違いという難しい問題が関わる場合があるが、日本の学問的な成果を発信するという視点からは、日本ではどのような解釈が主流であるかといったことを示していくのも重要なことである。

② 国外からの思わぬ関心の例…アルジャジーラが紹介した神道

グローバル化が進行する時代には、神道にもこれまで以上に多くの国々からの関心が示されるようになっていく。これまで多かった欧米、東アジアに加え、イスラーム圏からも神道への関心が寄せられるようになっていく。二〇〇五年に中東の放送局であるアルジャジーラから神道についての番組を制作したいという依頼を、日本在住のシリア人を介して受けた⁽⁶⁾。真面目な企画であるということを了解したので、筆者は制作に協力することにしたが、取材された内容は、十三分ほどの番組としてアラビア語で放映された。放映されたビデオが後日送付されてきたが、その内容から神道のどのような面にまず関心を抱くかがある程度読み取れた。

そう長くはない映像の中で何が紹介されているか。神道系の大学である國學院大學の様子が簡単に示されたあと、神道の歴史が簡単に紹介されている。この紹介部分は筆者が日本文化研究所の部屋で行ったものがアラビア語に翻訳されている。研究所が常磐松二号館と呼ばれていた古い建物の六階に置かれていた頃である。次いで伊勢神宮、明治神宮、厳島神社の空からの様子が出てくる。厳島神社の鳥居が説明されるが、海上の鳥居はやはり興味深いのであろう。またおみくじ、神社建築、鈴を鳴らしての参拝、祭式教室で学生が祭式を学ぶ様子も映されている。後日、番組制作

を担当したシリア人から番組の反響についての電話をもらった。非常に好評で多くの人から神道に関心をもったというコメントをもらったということであった。⁽⁷⁾

イスラーム圏の研究者が神道に関心を抱くことは少なくないようである。二〇一〇年十月に日本文化研究所主催で行われた国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」において、カイロ大学のイサム・ハムザ氏は、イスラームと神道の精神は非常によく似ているという旨の意見を述べた。ハムザ氏はCOEプログラムによる国際シンポジウムにも聴講に來たことがあり、神道には非常に関心があるということであった。

神道を例にして具体例を述べたが、こうしたことから、日本文化を国外に紹介するという課題をもったときに、英語圏への発信だけでなく、多様な言語によって、発信することが求められる時代になってきたのは明らかである。

③ フレームが異なれば〈日本文化〉も異なる

欧米の目から見た日本文化だけでなく、アジアの国々から見た日本文化、イスラーム圏から見た日本文化というような発想を日本人研究者も強く意識すべき時代になった。神道について考えるときは、宗教文化の違いということを考慮する必要がある。おおまかにでもあっても、世界の宗教文化の分布というものを踏まえておかなければならない。

これまで神道の研究者もキリスト教との違いということは意識してきた。これは英語での発信が中心であったというのと深く関わる。キリスト教の視点が意識されたときは、神道は多神教であるということがとりわけ強調される傾向があった。だが、キリスト教も少なくとも、ローマ・カトリック、プロテスタント、オーソドックスという大きな三つの流れがあり、一神教といってもカトリックのような聖人崇拜は、唯一神への信仰だけではない側面がある。

東アジアは歴史的に中国宗教の影響を受けてきたので、大乘仏教、儒教、道教などは互いに習合しつつ、各国の宗教文化に込み込んでいる。しかし、東アジアの場合は、近代化の過程で日清戦争、日韓併合、台湾併合、第二次大戦中の中国本土への侵略など、政治的・軍事的関係が複雑であるから、これが日本宗教を見る際のフレームにも影響を与えざるを得ない。とくに神社神道はそうした過去の歴史からの影響を強く受けている。この点は、意識しておかなければならない。

その意味では中東のイスラーム圏からの神道への関心は、あまりそうした歴史的経緯からの影響を受けていない。ただし、東南アジアのイスラーム諸国の場合だと、インドネシア、マレーシアなども、第二次大戦中の日本軍の侵略の歴史があるので、東アジアほどではないが、近代史を意識する必要がある。また東南アジアには、タイ、ミャンマー、ラオスなど上座仏教が多いので、単純に同じ仏教国という発想に立つわけにはいかない。

世界にはさまざまな宗教文化圏があるということを意識した上での、日本の宗教文化の発信は、これまでに比べ複雑にはなるが、〈日本文化〉の新しい側面を発見する機会にもなりうる。

むすび

〈日本文化〉は時代によって作られていると言える。それぞれの人の理解のフレームによっても異なった姿として描かれる。中には過度の美化があり、ノスタルジアに過ぎないものも散見される。ある側面だけを強調するような研究では、グローバル化や情報化が進行する時代には、研究そのものの信頼を失っていく。自分たちが発信する〈日本文化〉の偏りの度合いを反省するには、その議論がどのようなフレームを前提としているかを考えることが有効である。

そのためには、外国人が突きつけてくる多様な〈日本文化〉のフレームを知ることが役に立つ。

むしろそれぞれの国で描かれている〈日本文化〉も作られたものであり、それぞれの日本観を反映したフレームの中で描かれる。神道のイメージも例外ではない。日本国内でも神道がエコの代表に位置づけられることもあれば、軍国主義の加担者であったとする見方もある。どこに着眼するかで評価は変わるが、どれが正しいかというより、その多様な評価は、それぞれ神道のある側面に関係しているというふうに考えるのが適切である。国外からの視点を考慮するというときには、一つの宗教文化にも当然多様な解釈が生じるのだという発想に立たないと、異なるフレームについて知ることの意味がなくなる。

こうした異なるフレームを知るには、研究者による著作やメディア報道だけでなく、日本を訪れる外国人の行動の観察も重要である。有名な神社や寺院に行く多くの外国人観光客がいることが分かる。彼らが何をしているのか、何を見ているのか、何に関心をもっているのかを観察することも大切である。言葉は分からなくても行動や表情から理解できることがある。絵馬のように、多くの外国人が気軽に受け入れているものがある。参拝作法も見よう見まねで行う人もいる。

互いの文化が影響を与え合うのがグローバル化時代の特徴であるから、こうした観察は、一段と重要になってくる。このような観察も、自画像の〈日本文化〉と他者が描く〈日本文化〉のずれを見出すのに役立つ。人と人の交流、情報交換が格段にしやすくなった現代社会においては、それに応じた宗教文化の国際発信が模索されていいだろう。國學院大學の研究開発推進機構はその拠点になる上で利点がある。多様な宗教文化を理解する姿勢が蓄積されており、多くの神道研究者もいる。〈日本文化〉について考え続けていくインフラが豊かだからである。

註

- (1) 篠田謙一「DNAで読む日本人の形成史」(國學院大學日本文化研究所編『日本文化』はどこにあるか)春秋社、二〇一六年、所収) 参照。
- (2) マイケル・ヴィツェル「神話の『出アフリカ』―比較神話学が探る神話のはじまり」(井上順孝編『21世紀の宗教研究』平凡社、二〇一四年、所収) 参照。
- (3) 北欧などでは教会への献金がカードで行われることは珍しくない。
- (4) 韓国語版の作成はイ・ファジン(李和珍)氏が研究員として在籍していたので可能になったことである。
- (5) 國學院大學博物館のホームページ、パンフレット類は英語、フランス語、中国語、韓国語で記載されている。
- (6) アルジャジーラはカタールのドーハに本拠を置いてアラビア語で世界に情報を発信している。
- (7) その後のやりとりでシリア人の神道研究者が生まれる可能性があることが分かったのだが、それからの間も多くのシリア情勢がその可能性を奪ったようである。